過ぎ去る者として

李　　政　元

私たちに与えられている時間は限られています。その限られた時間をどのように生きるのか。多くの場合、私たちは、充実した人生を求めて、それを実現してくれそうなニーズ（必要）を満たさんと必死です。「これは必要に違いない。そう、あれも必要だ。」といった具合に、ニーズの足し算を繰り返しながら、限られた時間を費やします。

さて、その存在の時間が限られている私たちは、時間の経過とともに、これまでに必死に獲得してきたものに対する満足度が逓減していくことに、あるとき突如として気付かされます。それは、老いを自覚したときかもしれませんし、想定などしていなかった命に関わるような病気や怪我に見舞われた時かもしれません。遅かれ早かれ、充実した人生を送るうえで、時間をかけて獲得したものが、もはや必要でなくなるというような経験をすることになります。それはまるで、どこまでも平坦な大地が広がっていると思いきや、それが突如、崖となって終わるかのように。

私たちは、寒いからと重ね着をして着膨れするように、多くの物・もの・モノを手にしてきました。しかし、それら一切は時間の経過とともに、玉ねぎの皮を一枚そしてまた一枚と剥がされるかのように、私たちのもとから消えてなくなります。手からポロポロとこぼれ落ちていきます。そして、最後の一枚が剥がれ落ちた時、私たちには何が残っているのでしょう。

イエスは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」と言います。イエスが、「求めよ」というもの。「探せ」というもの。それが、私たちがこれまで手にしてきたもののうちにあることを願います。

あぁ、そうでした、主は大変気前のよい主人でした。

（総合政策学部准教授）